

現代とつながる古典学習 — 枕草子を通してものの見方を学ぶ —

上川寛子

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: hi_kamikawa@tottori-u.ac.jp

Hiroko KAMIKAWA (Tottori University Junior High School): Learning the Classics to Connect with the Modern World — Learning how to see things through “Makura no Soshi” —

要旨 — 平成 29 年に告示された中学校学習指導要領では、各学年とも古典に親しむことが重視されている。しかし、多くの生徒にとって、古典は役に立つものとして受け取られておらず、古典に親しむ態度につながるとは言いがたい。本実践では、随筆「枕草子」を通して古人のものの見方に触れることで、現代の私たちのものの見方が広がることを実感させ、生徒にとって古典が役立つものとなることをねらいとした。事後アンケートから、清少納言の鋭い観察眼や感性に触れることで、生徒は新たなものの見方に気づいたり自身の見方が広がったりすることに良さを感じており、古典を学ぶ意義を感じ取っていると考えられる。

キーワード — 古典に親しむ、枕草子、ものの見方

Abstract — The Guidelines for the Course of Study for Junior High School, published in 2009, emphasizes familiarity with the classics in each grade. However, for many students, the classics are not perceived as something useful, and it is difficult to say that it will lead to an attitude of familiarity with the classics. In this study, the aim was to make students realize that by experiencing the views of the ancients through the essay “Makura no Soshi”, they can broaden their views of things in the modern world and make the classics useful to them. From the post-lecture questionnaire, it can be concluded that the students felt the significance of studying the classics, as they noticed new ways of looking at things and expanded their own views by experiencing Sei Shonagon’s keen observations and sensitivity.

Key words — become familiar with the classics, Makura no Soshi, a way of looking at things

1. はじめに

1.1. 問題の所在

小学校での学習に古典学習が位置づけられ、中学校での古典学習は、小学校での学習を踏まえ、引き続き親しむことを重視した上で、その表現を味わったり、自らの表現に生かしたりすることに重点が置かれている(文部科学省 2019)。ここで言う古典とは、古文・漢文というだけでなく、我が国において古来引き継がれてきた思想やものの見方、考え方が含まれており(国語ワーキンググループ 2016)、現代にもつながる日本人のものの見方や考え方や捉えて、自らの生活や生き方に生かすことが求められている。

では、生徒にとって古典の学習はどのような位置づけになっているか。2年生での古典学習が始まるにあたり、事前にアンケートを行ったところ、古典の学習が役に立たないと

答えた生徒が 48.4% (62 人)、役に立つと答えた生徒が 51.6% (66 人)であり、約半数の生徒にとって、古典は役に立たないものと捉えられている。そして、役に立つと答えた生徒が、そう考えた理由についてまとめたのが表 1 である。

A は古文を学ぶ意義がはっきりと捉えられておらず、B は生活の中で古文に出会ったときのみに役に立つと考えているものである。C は古典の世界を味わうことに良さを見いだしており、個人の読書につながる可能性を持っている。D は古典の範囲を超えて自分の生活を豊かにすることを挙げているものである。この結果を見ると、役に立つと答えている生徒でも、具体的に意義が捉えられていない生徒 (A 3.1%) や古典と出会う場面に限定して役立つと答えた生徒 (B 23.5%) が多く、自身の生活や生き方に関わったり国語力を鍛えたりするものとして捉

表1 古典の学習が役立つ理由

		(自由記述)	
		理由	人数 %
		役に立たない	62 48.4
A	①	いつか役に立つ	4 3.1
B	②	日常で出会う古典の言葉の意味が分かる	8 6.3
	③	新たな古文に出会ったとき読める	20 15.6
	④	高校入試で問題が解ける	2 1.6
C	⑤	昔の生活や考えが分かる	11 8.6
	⑥	日本の歴史や伝統が分かる	7 5.5
D	⑦	自身の言語生活の向上につながる	6 4.7
	⑧	考え方が自分に生かせる	8 6.3

n= 128

えている生徒はCとDの25.1%と、とても多いとは言えない。

古典に親しむためには、古典に表れたものの見方や考え方の中に、新たな発見をしたり興味・関心を高めたりしていくことが重要であり(文部科学省 2019)、そのためには、古典を自分とかけ離れた古い時代を学ぶものとして学習するのではなく、自分と関わるものと感じられる学習の工夫をしていく必要がある。

1.2. 研究の方法と目的

文章に表れた筆者のものの見方に着目させ、新たなものの見方が獲得できたり、自分の表現に生かされたりすれば、古典を自分と関わるものとして捉えることができ、古典を学ぶ意義が感じられるのではないかと考え、本実践を行うこととした。

古典を現代とのつながりの中で捉えようとする実践として、増田ら(2013)の実践がある。増田らは、「枕草子」の授業実践を行い、ワークシートの記述から生徒が自然や四季についての認識を深めたことを捉え、古典を読むことの現代的価値を感じているとしている。しかし、直接生徒がどのように捉えたかは明らかにされていない。そこで、筆者のものの見方に着目した古典学習が生徒にとってどのような意義を持たせることになるのか、生徒の記述をもとに探していきたい。

2. 授業の実践

2.1. 授業のねらい

本実践では、教科書の定番教材である「枕草子」を扱う。「枕草子」は清少納言によって

平安時代に書かれた随筆である。第1段「春はあけぼの」は、「伝統的な和歌の視点」とそれとは異なる「独創的な視点」(長谷川 2018)が織り交ぜられ、当時の季節感が表現力豊かに書き表されている。

清少納言の視点は当時において独創的ではあるが、冒頭にもあるように現代にもつながる見方であり、現代の私たちに理解できないものではない。自分たちの周りを見渡すと、気づいていないだけで似たような事象や出来事はあり、共感できる部分がある。本実践では、やりくりのテーマのもとに、自分たちの季節感や経験を振り返らせ、筆者の季節感と比較させることで、筆者の細やかな観察眼に気づかせ、表現の参考にさせたい。

2.2. 学習計画

授業では、清少納言が取り上げたものや情景について、どのような点に趣があるのかを考えさせることで、清少納言の優れた視点や自分たちが気づかなかった視点に着目させたい。

第1時 枕草子について知る。

第2時 第1段の音読をし、読み慣れる。

自分と筆者の四季の捉え方を比較し、筆者のものの見方について考える。

第3時 筆者のものの見方を全体で共有する。

第4時 第125段「九月ばかり」を音読する。筆者が「をかし」と感じたものについて情景を想像する。

第5時 筆者のものの見方を全体で共有する。自分なりの「春はあけぼの」を書く。

2.3. 活動の実際

第2時では、まず生徒自身が四季それぞれで「いい感じ」と思うものをワークシートに記述させ、第1段の表現と比較させた。生徒が持っている材料は、自分たちが考えた季節の景物と、筆者の述べた景物である。生徒たちから挙げられた季節の景物は、「桜」「紅葉」など単語を挙げたものが多く、その季節を代表するような意見に重なる傾向が見られた。中には何があったかと考え込む生徒もいた。それを第1段の表現と比較することで、生徒たちは、筆者の視点がどのようなところに向けられているか考えて

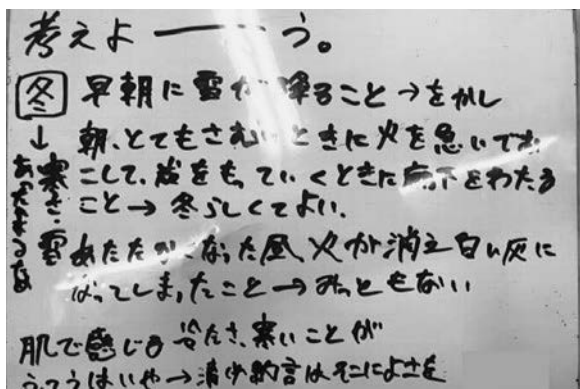


図1 筆者の視点(第1段)

いった。図1は、班でまとめた意見である。生徒たちは五感による季節の捉えや時間の経過による美しさなど、季節ごとの表現の特徴を見つけ、筆者のものの見方について考えることができた。班ごとに捉えた筆者の視点は、第3時に全体で共有し、自分たちの気づかなかった視点についても考えることができた。第4時では、第125段の「九月ばかり」を扱った。「九月ばかり」は雨上がりの景色の美しさを鋭い観察眼により描いた章段である。「をかし」と感じられる対象を文章中から探すだけでは昔の人のものの見方を捉えることにはつながらない。どのような点を「をかし」と表現しているのかを考えさせることで、情景を思い浮かべ、筆者の細やかで鋭い観察眼に気づくのではないかと考えた。文章の意味を確認した後、「本当に『をかし』と感じられるか」と投げかけてみると共感しない生徒も多く、どのような点を「をかし」と述べているのか、班ごとに考え説明させることとした(図2)。生徒は、露の美しさを伝えるため

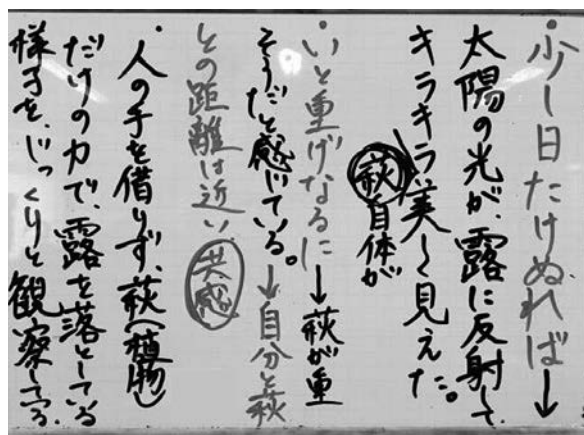


図2 「をかし」と感じた点(第125段)

に、前日の雨や雨が上がった後の朝日の様子なども想像して伝えようとしており、古文中の表現にこだわった読み取りを行う姿が見られた。また、自分のこれまでの経験や似ているたとえなどを交え、関連付けながら情景の説明を行っていた。「枕草子」は、独自の視点から述べられていると言われるが、共感できないものではなく、むしろ私たちにも共通するものの見方がある。それを言語化することで、筆者のものの見方について考えることができた。

2.4. 事後アンケートより

「枕草子」とその後の「徒然草」の授業を終えた後、事後アンケートとして清少納言の見方について感じたこと、思ったことを自由記述により答えさせた。また、「枕草子を学習してよかったことはありますか」という質問を、「ある」「ない」の二件法で選択させ、その理由を自由記述で答えさせた。

自由記述によって生徒が取り上げた清少納言の視点には、次のようなものがあった。

- ・探せば見つかるもの
- ・人があまり注目しないもの
- ・自然の中の一瞬の出来事
- ・人が気づかない自然の美しい変化
- ・生活の中に当たり前にあるもの
- ・時の移り変わりによる変化
- ・五感による捉え
- ・生き物の動き
- ・些細なこと
- ・小さな変化

このように清少納言の鋭い観察眼や、独特の感性、視野の広さ、多面的な見方に感心した記述が見られた。他にも、表現力や面白いものを見つけていこうとする姿勢に触れた記述が見られた。また、自分たちの言葉で言う「エモい」に当たるのでは、と現代に置き換えて捉えようとする記述も見られた。

『枕草子』を学習し、昔の人の見方に触れてよかったと思うことはありますか? という質問には、96.7%の生徒が「ある」と答えた。表2は、「ある」と答えた理由をまとめたものである。生徒の記述からは、興味関心を広げられることに触れた意見(C)が25.3%、自然に対して新たな見方を知ったり自分の見方が広

表2 「枕草子」を学習してよかったこと

		(自由記述)	
		理由	人数 %
		良かったことはない	4 3.3
A	①	未記入	1 0.8
B	②	古文の内容がより理解できた	2 1.6
C	③	昔の生活を知ることができた	22 18.0
	④	今と昔のつながりを感じた	7 5.7
	⑤	豊かな表現に出会った	2 1.6
D	⑥	自然に興味を持つようになった	1 0.8
	⑦	新たなものの見方を知った	38 31.1
	⑧	自分のものの見方が広がった	40 32.8
E	⑨	考え方や態度が他の場面に生かせる	5 4.1

n= 118

がったりしたと答えた意見(D)が64.7%であった。清少納言独自の視点で描かれている「枕草子」から、生徒は細やかにものを捉える視点や、多面的にものを捉える視点を見だし、自分の視点を広げる契機としている。さらに、多面的な視点や感じたことを文章に残して伝えていこうとする姿勢が、自然に対する見方に限らずこれからの自分の生活に役立つと答えた意見(E)もあり、古典を学習する意義を、自身の生き方に結び付けて考えた生徒もあった。

3. 考察

今回扱った「枕草子」は随筆であり、筆者の見方・考え方がはっきりと表れている。授業では、それを現代にもつながる(共感できる)見方であるという捉え方のもと活動を行った。それぞれの自然の景物の良さを、生徒自身の体験や記憶と重ねて考えさせ、生徒同士で共有させていく中で、これまで気づけなかったり自分が興味・関心を持っていなかったりしたものに目を向けさせることができたのだと考えられる。事後アンケートの生徒の感想に次のようなものがあった。

- ・ 当たり前の風景を、視点を変えてみることで感じるものがあることが分かりました。趣とまではいなくても、「なんかすてき」とか、「こんなのあったっけ」とか、小さな気づきが生まれると、歩いているだけでも楽しむことができました。
- ・ 最近はインターネットとか、家にこもることが多くて、景色にあまり触れない人も多い

のではないと思うけど、この「枕草子」で昔の人のように景色、季節の変化を楽しむことを思い出させてくれたと思います。

記述から新たな見方の獲得によって、豊かな感性が獲得されているのではないかと考えられる。古典は生徒と切り離されたものではなく、表現を支えるものの見方は、現代の生徒たちにとっても意義のあるものとなり得ることが分かった。このように、新たな視点を持って周囲に目を向けてみると様々なものが見え始めたという経験が、古典を学ぶ意義につながるのではないかと考えられる。

4. まとめと今後の課題

生徒の過ごしている環境は、まだまだ自然の多い環境である。にも関わらず、周囲の自然に目を向ける心のありようがない生徒もいる。生活環境の変化が自然に目を向ける機会を減らしているとも考えられるが、古人の見方に触れることで視野を広く持ち、これまで気づけなかったことに気づくことができる。本実践では、生徒が古典を学ぶ意義をどう捉えるか、生徒の記述をもとに探ってきた。今後は、古典が生徒にとってより意義のあるものとなるためには、どのような視点や活動が有効なのか考えていきたい。

5. 参考文献

- 文部科学省(2019)学習指導要領(平成29年告示)解説国語編
中央教育審議会教育課程部会国語ワーキンググループ(2016)『国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377097.pdf
長谷川千秋(2018)『枕草子』「春はあけぼの」授業実践のためのノート小・中学校における古典教育を考える—山梨大学研究紀要第28号
増田知子・吉田裕久・山元隆春・三藤恭弘・羽島彩加・朝倉孝之・岡本恵子・新治功・西原利典・松本小百合・三根直美(2013)新学習指導要領の下での授業実践—伝統的な言語文化の学習における小・中・高の連関について(2)—.広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要